

5. Ga-67 citrate の集積を認めた小腸の leiomyosarcoma の1例: その画像診断

小田野 幾雄 (新潟大学放射線科)  
 真保 禎二 (新潟臨港病院放射線科)  
 三輪 浩次・浅井 正典 (同 外科)  
 伊賀 芳朗 (新潟大学第一外科)

症例は58才の女性で右腹部腫瘤と右季肋部痛で来院した。Ga シンチで右腹部腫瘤に著明な集積をみとめ、肝シンチの際の RI-angiogram で hypervascularity がみられた。小腸造影で、回腸の内腔に突出した表面凸凹の手拳大の腫瘤陰影が描出され、CT でも小腸腫瘍と診断された。上腸管膜動脈造影法にて回結腸動脈より栄養される Ca 12×7cm の Tumor (hypervasular) がみられ、手術にて摘出し leiomyosarcoma (組織診) を確認した。小腸腫瘍の頻度は少ないが、悪性リンパ腫とならんで平滑筋肉腫への Ga 集積率は高いので診断上有用である。

6. 新生児先天性心疾患の心エコー診断

山崎 明・小田 良彦 (新潟市民病院小児科)

1982年8月より1985年5月までに、当院小児科に入院した新生児心疾患につき検討した。

同期間に当院に入院した新生児は326名であり、うち、低出生体重児に伴う PDA を除いた心疾患は24名で、これは全新生児の約7.4%にあたる。疾患の内訳を表1に示す。

当科への初診日令は出生当日が7名、日令7日以内が計15名と約63%であった。入院時の主訴としては、チアノーゼと多呼吸・陥没呼吸を合わせると70%であり、か

表1 病 名

心室中隔欠損	8名
フォー四徴	3名
大動脈弓離断複合	3名
大血管転位	2名
両大血管右室起始	2名
心房中隔欠損	2名
肺動脈閉鎖	1名
動脈管開存	1名
無脾症候群	1名
完全房室ブロック	1名
計	24名

つチアノーゼを主訴としても、大部分は多呼吸等の呼吸困難症状を伴っていた。

診断は主として心エコーで行われ、主疾患が心疾患であり、かつ心カテーテル又は剖検で確定診断が得られている14名中、12名で正しい診断が得られている。又、その診断が得られたのは、7名が入院当日で、全例入院3日以内であった。

以上、心エコー像を主として報告した。

7. 甲状腺癌の超音波診断 第三報

新妻 伸二 (新潟県立ガンセンター放射線科)  
 筒井 一哉 (同 内科)

甲状腺癌の超音波診断の新しい診断基準として、前回皮膚直下の筋膜や頸椎前面の筋膜への浸潤について報告した。今回この診断基準を採用してからの手術例が、10例となったので、検討を行い、その正否について調査をした。

その結果は10例中5例が誤診であった。しかし個々の症例を検討したところ、2例は読み過ぎ、1例は見逃し、1例は悪性リンパ腫、1例のみがこの基準では診断不能であった。

結論として、この診断基準は、筋膜浸潤のない微少な甲状腺癌の診断は出来ない。だが従来のパターン分類のように、癌である比率が高いという基準ではなく、「この所見があれば、ほぼ癌といていい」という所見であり、今後この診断基準を変えることなく、症例を重ねて検討したい。

8. CT による髄芽細胞腫の放射線感受性の評価

渡辺 明良・田中 隆一 (新潟大学脳研究所)  
 武田 憲夫・鈴木 康夫 (脳神経外科)  
 土田 正 (新潟県立中央病院脳神経外科)

本腫瘍の放射線感受性は、放射線治療による症状の改善や生存期間の延長等の経験から、以前より知られていたが、放射線治療による腫瘍の縮小や消失を、CT で観察した報告はほとんどない。今回、我々は、当科における本腫瘍の治療成績と、CT 上の放射線感受性を評価したので、報告する。放射線治療完遂例28例について、照射野別の生存率の差を検討すると、全脳脊髄照射群が、 $p=0.02$  で非全脳脊髄照射群よりも良好であった。CT 上の放射線感受性は、術前照射5例、術後照射2例、非手術1例について、enhanced lesion の面積変化として